

Title	蕪村・貴賤風雅論
Author(s)	藤田, 真一
Citation	語文. 1995, 62-63, p. 25-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68868
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

じめに

心構えとして、元禄二年春、猿雖宛と推定される手紙のなかで、の生活にはいった。延宝八年(一六八〇)のことである。そして、「月をわび、身をわび、抽きをわびて」(『武蔵曲』)、「侘び」を極め、うとする。また同時に、みずからを「乞食の翁」と呼ぶようになようとする。また同時に、みずからを「乞食順礼ごときの人」とも表自らの分身のごとき旅人を、「桑門の乞食順礼ごときの人」とも表していた(『奥の細道』)。 そもそも、その旅に出るにあたっての生活にはいった。延宝八年(一六八〇)のことである。そして、の生活にはいった。延宝八年(一六八〇)のことである。そして、の生活にはいった。

つしく〜てこもかぶるべき心がけにて御坐候。の跡もなつかしく、猶ことしのたび(「奥の細道」の旅)はや一鉢境界乞食の身こそたうとけれとうたひに侘し貴僧(増賀聖)林・デー・デオーダ素・教皇の『井戸』を書き、

を試みたかと推測されるものである。

また、右の手紙に続けて、「道の風雅の乞食」という語句が見え「貧」の演技様式であったとさえいえるだろう。いるというよりも、その人の自己意識の一つの表現形 式 で あ り、と述べていた。これらは、芭蕉の貧しい生活実態そのものを表して

春」の句に、西行『撰集抄』の逸話中の人物を託すように、芭蕉に

るように、あるいは、元禄三年の歳旦吟「薦を着て誰人います花の

の「清風」を、「かれは富るものなれども、志いやしからず」と称「雅」に通じていてほしいと願うことばであったろう。『奥の細道』った。そして、「素翁(素堂)りはく(李白)にかはりて、我貧をとって、「乞食」の境界と「道の風雅」とはつながり合うものであとって、「乞食」の境界と「道の風雅」とはつながり合うものであ

同年秋に作られた、愛弟子大魯の「秋輿八句」に触発されて、創作氏の推定によると、安永三年(一七七四)冬の作である。とすると、無村は、「貧居八詠」と題する連作を試みたことがある。尾形仂であろうとすることは、必然であった。

八詠」の末句、「筆豁に筆の氷を嚙夜哉」の発想に通じているよう「老視樓」水筆損」尖」というのがある。これは、あたかも、「貧居一稿)。 しかし、より大切なことは、「貧居」というのが本来詩題一稿)。 しかし、より大切なことは、「貧居」というのが本来詩題という見解があった(筑摩書房『古典日本文学全集』三二、栗山理という見解があった(筑摩書房『古典日本文学全集』三二、栗山理という見解があった(筑摩書房『古典日本文学全集』三二、栗山理という見解があった(筑摩書房『古典日本文学全集』三二、栗山理という見解があった(筑摩書房『古典日本文学全集』三二、栗山理という見解がある。これである。

につながっていくように思われる。の例句とを併せると、第二句目の「かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥」の例句とを併せると、第二句目の「かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥」の「賢哉、回也」の語句を挙げているのと、「高樹有、巣鳩笑、拙」の「賢哉、回也」の語句を挙げているのと、「高樹有、巣鳩笑、拙」また、「貧居」の項の冒頭に、顔回瓢箪の故事を出して、『論語』は、第五句「氷る灯の油うかゞふ鼠かな」に関連するようにみえる。につながっていくように思われる。

向の形があって、そこに俳諧としての「貧の生活ぶり」を表現しよたい。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩ない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩らない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩らない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩らない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩らない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩らない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧居」があり、詩らない。要は、この連作の底に、詩題としての「貧の生活ぶり」を表現しよれて、名の制作動機として、弟子の作品からの対象があっただろうという。

いうことを考察するものである。 賤」の相対する概念をこえて、蕪村がいかなる風雅をめざしたかと ・ 本稿は、蕪村の「貧」の表現様式を、作品に即して考え、「貴・ うとしたものということになる。

一 小 家

離落

『蕪村全集』発句編に明和六年作と推定。『俳諧新選』『続明鳥』 うぐひすのあちこちとするや小家がち (蕪村句集)

だものである。 で鳴いたかと思うと、またこちらで鳴く、といった早春の景を詠んに見える。句意は明解、小家の建ち続く垣根づたいに、鶯があちら誤記で、竹で編んだ簡素な垣根のこと。この詞書は、他に『続明鳥』のたと思われる。句形に異同はない。ただし、「離落」は「籬落」のの二撰集に重ねて入集するほか、句稿類にも載録し、自信作であっの二撰集に重ねて入集するほか、句稿類にも載録し、自信作であっ

かもしだしているといえよう。そして、この語義は、以後近世に至ている。ことに先の「夕顔」の文章は、京五条界隈の猥雑性をよくひいでけること」(傍点藤田)とあるのも、小家の卑賤ぶりを言っひいでけること」(傍点藤田)とあるのも、小家の卑賤ぶりを言ったもだ、粗末・貧相の義を属性としてもつことばである。同じ『源ともに、粗末・貧相の義を属性としてもつことばである。同じ『源ともに、担末・貧相の義を属性としてもつことばである。同じ『源ともに、紅末・貧相の義を属性として、この語義は、以後近世に至いたしかに、「小家」は、文字どおり家のサイズの小ささをいうと

っても大きな変化は認められない。

しかし、「小家がち」と「あちこちとする」から、ただちに源氏考えるならば、一句はたしかに俳諧性に富む句作りとなる。さらに、歌語「このもかのも」を、「あちこち」と俳言化したと

う。そこで、田中解を尊重しつつ、別回路から迫ってみたい。り、逆に「鶯」から源氏に至るには、大きな跳躍を必要とするだろり風景までは、ずいぶん距離があるといわざるをえない。というよを想起することはかなり困難であり、また、源氏の場面から鶯の鳴きを想起することはかなり困難であり、また、源氏の場面から鶯の鳴きを想起することはかなり困難であり、また、源氏の場面から鶯の鳴きを想起することはかなり困難であり、また、源氏の場面から鶯の鳴きを表している。

題を目の前にして句案したはずである。題と句の間の桟となる、なとされる(尾形仂『蕪村自筆句帳』)。とすると、蕪村は、「鶯」の季題は、明和六年一月二十七日、田福亭での兼題であったそのために、制作現場から発想の過程を推測してみよう。本句の

と、以下のようになっている。(そこで、『増補和歌題林抄』(宝永三年刊)の「鷺」の項をみるにがしかの媒介があってしかるべきであろう。

たれることになる。「ころうな」、「うちなった、「こう」によいいひ、まがきの竹にねぐらさだむるともよみ、はながさにぬふいた、まがきの竹にねぐらさだむるともよみ、はながさにぬふたによりいでゝはるをしらせ、ふるすをすてゝ花にうつるとも

人は、鶯の春を告げて鳴くのを心待ちしている。その待つ心情にであることを、「籬落」の詞書で示そうとしたのではないか。び来った鶯が鳴く音をあげるのは、「しづかかきねにこづたひて」び来った鶯の本意をふまえて、蕪村は、小家がちなる界隈に飛親しんでいく、というのが、「鶯」の本意であると説いている。早春谷から出てきた鶯が、「しづがかきねにこづたひて」、里に馴れ早春谷から出てきた鶯が、「しづがかきねにこづたひて」、里に馴れ

おいて貴賤の区別はないはずである。たとえ陋屋に住まいしようが、

それも賤しき小家がちの界隈ならではと了解されるのである。とれも賤しき小家がちの界隈ならではと了解されるのであるが、にまずは印象づけられるとともに、よくよく注意すると、かならずにまずは印象づけられるとともに、よくよく注意すると、かならずにまずは印象づけられるとともに、よくよく注意すると、かならずにまずは印象づけられるとともに、よくよく注意すると、かならずにまずは印象づけられるとともに、よくよく注意すると、かならずにまずは印象づけられるとともに、よくは、一次の人びとに春をらじとぞ思ふ」(古今集・春)のであるから、一覧の鳴かぬかぎりは(春は)あ

みをかいま見せるのは、「小家がち」の語の働きによるところが大めなかいま見せるのは、「小家がち」の語の働きによるところが大り」のように、明らかに大・小の対比効果としてこの語が詠まれたり」のように、明らかに大・小の対比効果としてこの語が詠まれたり」のように、人様の朝食を重ね合わせたところに俳諧的滑稽ある。たとえば、「水鳥や朝めし早き小家がち」は、群れなす鳥たある。たとえば、「水鳥や朝めし早き小家がち」は、群れなす鳥たある。たとえば、「水鳥や朝めし早か家」ところで、蕪村には、この他にも「小家」「小家がち」の語を用ところで、蕪村には、この他にも「小家」「小家がち」の語を用ところで、蕪村には、この他にも「小家」

貞」にも生かされており、あたかも、かつて小家に、さもふさわしろう。「桃」と「小家」の連想は、「沙魚を煮る小家や桃のむかし屋」が付合とされる(『類船集』)ような連想から発想された句であきい。また、「さくらより桃にしたしき小家哉」は、「桃」に「賤

く咲き匂っていた桃をなつかしげに回顧する気味がある。

げな光景を詠んだものである。一面の菜の花の豊かさと対照的に、す油が不足するのか、細々とした明かりしかもれてこない、わびし畑を背景に、肩を寄せ合うように建ち並ぶ小家からは、灯火をともあるいは、「菜の花や油乏しき小家がち」は、広々とした菜の花

以上を概観すると、「小家」の語が含む、語義の多様性を最大限ったりと食糧が蓄えられているという心強さが詠まれている。あることに加えて、小家の続く頼りなげなさまとはうらはらに、ゆあることに加えて、小家の続く頼りなげなさまとはうらはらに、ゆ薬種油を採取して生活を営む家々の貧寒さが強く心をうつ句である。薬種油を採取して生活を営む家々の貧寒さが強く心をうつ句である。

雅性を確保しようとしているといってよいだろう。その句作りには、いつも何がしかのヒネリが加えられて、俳諧的風に駆使しながら、句作りされていることがわかるだろう。そして、

二貧賤

月天心貧しき町を通りけり

(蕪村句集)

真宝』前集所収の、邵康節作「清夜吟」にもとづいている。としたところに、本句の命があると見ている。この語句は、『古文らまとめた「自筆句帳」でこの句形に定めている。諸注、「月天心」初案は、上五が「名月や」(『落日庵句集』)であるが、晩年に自

月到天心処 月 天心に到る処

風来水面時 風 水面に来る時

計算が入り、 そのでは、 こののでは、 一般清意味 一般の清意の味はひ

成』損斐高稿)と解するごとくにである。
『貧しき町』の変化に遭遇した感動を詠んだもの」(『日本名 句集感じさせるというのである。世人の知ることの希な、そのようなだ解が要求されるだろう。たとえば、「昼間は薄汚れた町並みも、だ解が要求されるだろう。たとえば、「昼間は薄汚れた町並みも、だ解が要求されるだろう。たとえば、「昼間は薄汚れた町並みも、当然、「月天心」だけに目を向けるのではなく、詩意全体を汲ん当然、「月天心」だけに目を向けるのではなく、詩意全体を汲ん当然、「月天心」だけに見を向けるのではなくにである。

をいうだけでなく、人みな寝静まった深更であることも、「月天心」らないことが強調される。たしかに、天の中央に輝く月光の美しさらに、初案形の「名月や」ではなく、「月天心」でなければな

の一語で言い表すことができたのである。

る」(『日本歳時記』)ものであり、ことさらに今宵の月を愛でるのり合わせである。「名月」なら、中秋の月、「歌人騒客の晴を期すてはならないだろう。「名月」に「貧しき町」は落差の際立った取しかし、翻って、初案で「名月や」と置いた作者の心情も無視し

の初案形である。初案は、名月と貧しい町との対比の句である。むなしいばかりである。そこに逆説的な美を見いだしたのが、本句町が、貧しいのである。慈しむ人がいなければ、月は美しくない。もがら、町が貧しいのではない。この美しい月などに目もくれないしき町」ではみな寝静まって愛でる人などありえない。薄汚れていてある。そのせっかくの名月も、「歌人騒客」などとは無縁の「貧である。そのせっかくの名月も、「歌人騒客」などとは無縁の「貧

ても、「貧」の中に「月」を見る美意識は、蕪村独特である。いう句のある蕪村ならではの、ひとり月見の句であった。それにしり我が物とする喜びがある。「中~~にひとりあればぞ月を友」として知るもののない、この絶妙の光景を、我ひとり堪能することが光をあびて一気に清らかなものとなる。さらに、町のだれひとりと光をあびて一気に清らかなものとなる。さらに、町のだれひとりと

およそ風雅なるものとは無縁な暮らしをしている女が、梅の花に目なたに梅の花が美しく咲いていた、というのである。貧しさのため、縫い物にいそしむ女が、針が折れてふと目を上げると、視線のか針折て梅にまづしき女哉

を留めて、雅なるひとときを持つ。梅=雅と貧=俗とをつないで、

つの世界に同居させたのは、 若楓貧しき賤がはき掃除 「針折て」の働きである (落日庵句集)

除している傍らの楓の木は、鮮やかな若葉が美しい。その男にそれ るものとが対比されている。あるいは、貧が若楓の美しさを裏から が目に入っているかどうかも怪しい。ここでも、美なるものと貧な 身分低き者(下男など)が、奉公先か寺などの庭を懸命にはき掃

支える関係になっているといってよいだろうか。注意すべきは、 「貧」と「賤」とが結ばれていることである。貧しさと賤しさとは、

似かよった概念をもっている。「貧」のすぐ隣に、「賤」がある。 ひとりの貧乏僧が、秋の夜の寒さも厭わず、一心不乱に仏を彫っ 貧僧の仏をきざむ夜寒かな

(蕪村遺稿)

ている。仏には尊さや気高さが刻まれることであろう。僧侶として の尊さがここにはある。この句では、僧の「貧」であることが、仏 の身分も名誉も望まなかったようなこの僧の、まさに貧なるがゆえ

を刻む行為に、「貴」の保証を与えている。

雨の時貧しき蓑の雪に富り

(蕪村遺稿)

鶴の毛衣となって美しく富貴であるとする。雪が蓑を貧から富へと、 雪に覆われると、一転して富貴へと様変わりする、というのである。 『蕪村全集』の解は、『蒙求』の「王恭鶴氅」を典拠として、雪が 雨にしとど濡れた蓑はいかにもみじめたらしい。そのような蓑が

価値の逆転がおこなわれたのである。 ればならないのか。それは「貧」の語が、「賤」の語と隣り合わせ 蓑はむろん雨具である。雨が降れば身につけるものである。しか 本然の利用がなされて、それがなぜ「貧しき」と表現されなけ

> るものなのである。そんな蓑を、「貧」から「富」へ、そして「賤」 ていた。その操作をおこなわせたのが、俳諧である。卑俗を高雅へ を加えることによって、貧賤に属するものが風雅の世界に転じられ れを、「富」に転換したところが俳諧であり、詩である。 から「貴」へと引き上げる役割を果たしたのだが、「雪」であった。 にではなく、「賤」に属する語である。蓑は、賤なる者たちの着す のものとして意識されるからではないか。『俳諧小傘』のなかで、 ・順礼・人歩・落人」などが用意されている。これらはすべて「貴」 「蓑」は、付合語として、「船頭・墓守・鵜飼・菰刈・山人・百姓 「蓑」が貧に属している間は、陳腐なる散文的世界にとどまる。そ 以上見てきた、「貧」を詠んだ句は、いずれも、何がしかの操作

ょ

昇華させる方法が、俳諧の方法である。

そして、また「小家」の陋屋である。となれば、「よき人」と「小 情が隠されていることになる。そこに、艶なる秘め事を感じるのは 足を踏み入れるはずはない。それを宿したというのは、よほどの事 家」は、本来別世界のものであろう。「小家」になど「よき人」が 説する。「よき人」は、とりあえずは、高貴な人の意としておく。 そのうえで、さらに、『源氏物語』夕顔の巻などの俤に似る、と解 方をお泊めした貧しい小家。まるで夢のような心地である」として、 『蕪村全集』の解は、「朧月の艶美な夜、思いも寄らず高貴なお よき人を宿す小家や朧月

恋めいた秘め事の匂いをただよわせるのである。田舎に遊びにきた 当然であろう。「よき人」と「小家」のことばのアンバランスが、

は生じない。落差のないところに、意味の広がりを期することはで その説では、「よき人」と「小家」は平面的になり、語義の位相差 だとする、木村架空の説(『蕪村夢物語』)に従うことはできない。 都の人一般を「よき人」と言って、たまたま一軒の小家に泊ったの

街角で不特定の人間をのせるような辻駕に、「よき人」が乗るな **辻駕によき人のせつころもがへ**

(蕪村句集)

にならない。

きない。もちろん、恋のニュアンスも生まれない。それでは「蕪村」

どということは通常では考えられない。戸も覆いもなくて、顔をあ

駕に乗る気持ちにさせたのである。「更衣」は、もとは宮中の行事 夏の軽装が、「よき人」の身も心も軽々しくさせ、ついちょっと町 を絶した光景である。それを可能にしたのは、「更衣」である。初 らわにする辻駕に、ひとかどの御方がお乗りになっているとは想像

であったものが、次第に民間に広まったものといわれる。そこで、

貴人も庶民も気分を等しなみにさせるとされたのであろう(後述)。 「能き人」が甘酒を三度お替わりをした、というだけの句である。 能き人や 醴 三たび替にけり (落日庵句集)

ずることになっていた。したがって、甘酒を口にすること自体が、 夜酒」とも呼ばれ、また、古来六月朔日から七月末日まで天子に献 甘酒は、「一宿ニシテ熟スル」(『和漢三才図会』)ところから、「一

を所望したところに着目すべきではないか。 ことに注目し過ぎないほうがよいと思う。むしろ、三度のお替わり のごとく、「身分高き人が庶民的な甘酒を賞味する」(傍点藤田) 「能き人」にふさわしくない、というのではない。『蕪村全集』の解 たとえば、同じ蕪村に、「三椀の雑煮かゆるや長者ぶり」という

> 風で、年始にふさわしい豊かさを感じせしめる、とするべきではな 詠んだのではなく、三椀のお替わりをするところが、いかにも長者 代わり」して、「貧しいながら満ち足りた思い」(『蕪村全集』)を いだろうか。 句がある。これも、「ちょっとした長者を気取って雑煮を三杯もお

る。なるほど「能き人」ならではのお振舞いだ、というのである。 召し上がったところに、「能き人」の本性をみて、賛嘆したのであ りをなさったことに驚いているのではないだろう。甘酒をたっぷり 「や」の切れ字がそのような解を要請している。 「醴」の句も、身分高き人が甘酒などというものを三度もお替わ

智子氏の『几董俳句全集』によると、 蕪村の愛弟子几董も、しばしば「よき人」の句を作った。浅見美

よき人にそと沙汰し見るや河豚汁

よき人の傘にとまりてせみの声 よき人の踊習ふや盆の果

よき人の菊見に来ます小家哉

その他の作が見える。それぞれに、蕪村の作例に共通する発想が認

ろう。 する句作りである。蕪村の句法を襲ったものということができるだ の大きな落差を、「菊見」という雅びなる行為によって埋めようと められるだろう。とくに、右の最後の句は、「よき人」と「小家」

見え、それは「この作品ではたしかに異例的な頻度で」ある、とさ 語のようである。西川清治氏の「つれづれ草『よき人』の論」(『法 政大学教養部紀要』第十二号)によると、全部で九箇所(九段)に ところで、この「よき人」の語は、『徒然草』に顕著に見られる

と概括的に述べている。り大きな典型として定着していたことの証左となしうるであろう」り大きな典型として定着していたことの証左となしうるであろう」れる。そして、「このことは兼好の心の中に『よき人』の像がかな

とする。それに「肉づけ」をすると、「安んじてしみじみと話ので全体としては、「身分もよく教養ある人」というとらえ方ができる逐次に意味を考察している。個別の意味のずれを押さえたうえで、以下、西川論文は、「よき人」の使われ方のそれぞれについて、

ずしも具体的ではないし、限定的ともいえない。むしろ、漠然とさ「よき人」の、「よし」という語の指し示す意味内容は、かならな人物を、総体としての「よき人」といってさしつかえないだろう。ちるような人物」と評されている。これを要するに、最高の理想的らるような人物」と評されている。これを要するに、最高の理想的人」、「古典や故実にも明るいはずの人」ということになる。さらに、人」、「古典や故実にも明るいはずの人」ということになる。さらに、

に高尚な好みを持つ人」、「ものの情趣の真の享受のしかたを知るきる人」、「親しさのうちにも節度・作法を知る人」、「生活の様式

総体的理想像が内包されているということができるだろう。のなかに、身分・教養・美的感受性・人柄といった、いわば人間のであることに由来するものである。しかし、かえって、その曖昧さ

えしている。それは、『徒然草』の「よき人」の統一的概念が曖昧

載)の論文や、多くの注釈書類において、蕪村作品が『徒然草』を受容」(『俳文芸』二十二号、のち江戸人物読本『与謝蕪村』に転が、日本の古典のなかでも、とりわけ『徒然草』に親炙していたこる背景に、『徒然草』があったと推測することは容易である。蕪村そこで、蕪村にたち戻る。蕪村や几董が「よき人」の語を多用すそこで、蕪村にたち戻る。蕪村や几董が「よき人」の語を多用す

安永二年刊の『此ほとり』第四歌仙中に、右の書であったことは確実である。

援用することの多いことが指摘されている。

『徒然草』が蕪村の座

能住居秋の暑さのゆかしくて
新聖霊の給仕する也
「新聖霊の給仕する也」
第四歌仙中に

る。この物言いは、「よき人」と通じ合うところがあるだろう。にいう理想的住居を、蕪村は「能住居」と一言でいい取ったのであ折、「夏をむねと」した「能住居」を提示したのである。『徒然草』第五十五段の住居論によっていることは明らかである。『徒然草』第五十五段の住居論によっていることは明らかである。という、几董・蕪村の付合いがある。この「能住居」というのが、という、几董・蕪村の付合いがある。この「能住居」というのが、

親王をさすようであるが、身分の高貴さや志操の高さの点において、という例がある。この「よき人」は、詞書によると、妙法院真仁法よき人のこゝろたかさにたぐへ見む梢の花も月のひかりも近世和歌においては、たとえば、橘千蔭の『うけらが花』に、

よき人のながき心は初春のうら~~照す日影なりけり

申し分なき人物をいっているのである。

次は、上田秋成の『藤簍冊子』一に見える歌である。

うとするときは、「あて人の岡に立聞きぬたかな」と、明確に「貴のが、この貴人に付与されている。蕪村がこれと同様の意味を出そように、限定的で、狭い意味で用いられている。のどかな心というここにいう、「よき人」は、「貴公子」という題によって明らかなここにいう、「よき人」は、「貴公子」という題によって明らかな

人」にあたる語を用いている。『よき人』に重なる語義をもってい

この語に対する蕪村の理解と、同時代の和歌のなかでの使用例との間に、大きな懸隔は認められない。だが、「よき人」をただ称揚しので、それが即俳諧中の人物とはならない。「小家」にてあい場げる和歌のとらえ方が、俳諧にすぐつながるわけではない。蕪村の「よき人」の句の場合も、総体としての理想的人物を思い描いて句作りされている。しかし、理想的人物像を申し述べたところで、それが即俳諧中の人物とはならない。「小家」に宿り、「辻為をおこなって、ようやく俳諧中の一人物となりおおせたのである。にだし、それが俗の世界にたんに堕しただけのことであれば、詩とただし、それが俗の世界にたんに堕しただけのことであれば、詩となることはできない。「よき人」が規範性を失うことなく、しかもただし、それが俗の世界にたんに堕しただけのことであれば、詩となることはできない。「よき人」が規範性を失うことなく、しかもなることはできない。「よき人」が規範性を失うことなく、しかもなるととはできない。「よき人」が規範性を失うことなく、しかも然の世界で生き生きとしていなければならない。それは、雅と俗の、ある種の合一が果されることを意味する。そうした文芸化の過程をある種の合一が果されることを意味する。そうした文芸化の過程をある種の合一が果されることを意味する。そうした文芸化の過程をある種の合一が果されることができるだろう。

という意味である。

しかも、そこには、蕪村ならではの俳諧的営為があったはずである。

四貴賤風哦

学びする机の上のかやり哉蚊遣火や柴門多く相似たりいとまなき身にくれかゝるかやり哉腹あしき隣同士のかやりかな

いずれも蕪村の「蚊遣り」の発句である。第一句は、短気で、怒

うにも見える。

机の上に取り残された蚊遣りがむなしく煙をあげるばかりである、その煙ったさに閉口して勉強どころではなくなって退散、あとにはいかかる、というもの。また第三句は、屋内から蚊遣りの煙が立ちたりよったりである、というものである。最後の句は、学問にいそ見ってくる、その界隈の簡略粗末な門のならぶ風景は、いずれも似いかかる、というもの。また第三句は、屋内から蚊遣りの煙が立ちたりよっために、せっかく用意された蚊遣火だったのだが、本人はしむ者のために、夕暮れ時ともなると容赦なく蚊遣りの煙がおそなが、ない、阪港の隣同士の住人が、蚊遣りの煙にいさかいをおこしりっぽい、陋巷の隣同士の住人が、蚊遣りの煙にいさかいをおこしりっぽい、陋巷の隣同士の住人が、蚊遣りの煙にいさかいをおこしりっぽい、阪港の隣に

歌題(いずれも『明題部類抄』中の歌題)を、俳諧で詠んだかのより、「戦遣り(火)」は歌語である。この題を歌に詠じるときの心得が、『初学和歌式』(元禄九年初版刊)には次のように説かれる。が、『初学和歌式』(元禄九年初版刊)には次のように説かれる。が、『初学和歌式』(元禄九年初版刊)には次のように説かれる。が、『初学和歌式』(元禄九年初版刊)には次のように説かれる。されかいる遠里にけぶりのたつ景気をいひ、下くゆるけぶりをうきみの思ひによそへ、一村雨の名ごりに煙のしめる心をいへり。すべていやしき家にするわざなり。仍しづがかやりなど読り。すべていやしき家にするわざなり。のしづがかやりなど読り。すべていやしき家にするわざなり。成は、かやりのけぶりのたつをみて、中間により、「隣家蚊遣火」「晩蚊遣火」「里蚊遣火」といった側部応用編といった趣すら呈している。なかでも、先の蕪村の一〜作諧応用編といった趣すら呈している。なかでも、先の蕪村の一〜作諧応用編といった趣すら呈している。なかでも、先の蕪村の一〜作諧応和歌によりには次のは、かいには次のように説がれる。この題を歌に詠じるときの心得が思り、「吹きないとは次のように説がいる。この題を歌に詠じるときの心得が、『初学和歌は、「神歌は、「神歌は、「神歌は、「神歌は、「神歌ない。」には次のようには、「神歌ない。」には次の表しいでは、「神歌ない。」には次の思いには、「神歌ないとは、「神歌ない。」には次のようには、「神歌ないとは、「神歌ない。」には、「神歌ない。」には、「神歌ないというないとは、「神歌ないとは、「神歌ないというない。」には、「神歌ないとは、「神歌ないとないとないとないとないとない。」には、「神歌ないとないとないとないとないとないとないといいとないとないとないとないとないます。

・ 対遣火は、和歌では、貧かつ賤に属するものであり、そのイメーな態度だといえるだろう。

を置いて、生活をともにする立場は、けっしてとらない。賤しきもまり」眺めやる立場にしかいないのである。「蚊遣火」のなかに身の側にあるものであったから、本質的に「貴」の美意識にかなうもの側にあるものであったから、本質的に「貴」の美意識にかなうもどう意識されていたのであるか。もちろん、和歌はあくまでも「貴」どう意識されていたのであるか。もちろん、和歌はあくまでも「貴」にのしか詠まないのであるか。もちろん、和歌はあくまでも「貴」とう意識されていたのであるか。

男は男の情、女は女の情、老人は老人の情、壮夫は壮夫の情、貴人は貴人の情、賤者は賤者の情、僧は僧の情、俗は俗の情、本居宜長の『紫文要領』下巻に、次のような「貴賤論」が見える。

区別は截然と意識されていたはずである。

のを、傍観者として眺めているのである。その意味で、「貴賤」の

り、見る人よくよく心をつけて味ふべし。されば、貴人の情とず、言語もすこしづゝかはれば、それもそれが\にかきわけたの中にも、それが\かはれるやうをかきわけたり。情のみならとすこしづゝかはる所の有物也。さればこの物語(源氏物語)

この文章は、和歌を詠むにあたっての心得として、なぜ貴賤の差別

賤者の情とかはれる所有事勿論也

を設けなければならないかを、間答形式で説いたものである。ただとを示している。宣長の歌学は、二条家流を基礎としており、いの箇所では、「人情は和漢・古今・貴賤の違いのあるところに主意があるといってよいだろう。それは、「古への歌はみな中というのと同意と考えられ、ヒトを貴と賤に分けて、和歌は本来というのと同意と考えられ、ヒトを貴と良に分けて、和歌は本来というのと同意と考えられ、ヒトを貴と良に分けて、和歌は本来というのと同意と考えられ、ヒトを貴と良に分けて、和歌は本来というのと同意と考えられ、ヒトを貴と良に分けて、和歌は本来というのと同意と考えられ、ヒトを貴として貴賤の違いのあるところに主意がある。ただとを示している。宣長の歌学は、二条家流を基礎としており、たことを示している。宣長の歌学は、二条家流を基礎としており、たことを示している。宣長の歌学は、二条家流を基礎としており、たことを示している。宣長の歌学は、二条家流を基礎としており、たことを示している。宣長の歌学は、二条家流を基礎としており、し、別の箇所では、「検討の意味を表示と思われる。

月一日は白がさねとみえたり」という記事がある。これは、更衣のよそほひは品もわかれず、といふ歌あり。しかれば、上下ともに卯める人ありしに、賤の衣も昔は白かるべく候。白がさねしてけふのる。松井幸隆の『渓雲問答』に、「白重、賤が身におはぬよし。よ次に、和歌における貴賤の区別を、具体的な事例にとって見てみ

のである。 のでる。 のである。 のでる。 のである。 のでる。 ので

衣」という和歌題が挙げられており、その例歌として、寂蓮の、しかし、こういう場合もある。『増補和歌題林抄』に、「貴賤更

人なみにしづがたもとのかはるこそはなのころもは名さへおし

であり、裏返していうと、通常賤しき者は「人」の数に入らぬのが貴人なみのこと、更衣の今日が貴賤等しなみであるのは特別のこと衣に裝いを改めるものだ、と詠んでいるのである。「人なみ」とは、が掲出されている。更衣の時節には、賤しき者も「人なみに」花のが掲出されている。更衣の時節には、賤しき者も「人なみに」花の

のような歌を詠んでいる(稿本『六帖詠藻』)。 蕪村や宣長と同時代の人であった、小沢蘆庵も同じ題のもと、次歌詠みの常識であったのである。

でも同様である。 でも同様であることが前提となって詠まれている。次の二首の歌存在のものであることが前提となって詠まれている。次の二首の歌この歌でも、「宮人」(貴)と「山がつ」(賤)とは本来は別々の宮人の袖つき衣山がつのうづら衣もけふはかふめり

貴賤夏祓

ぞするいやしきもよきもうきせのかはらねばみのほど/\のはらへをいやしきもよきもうきせのかはらねばみのほど/\のはらへすらしもみのうさやへだても波のゆふは川高きいやしきはらへすらしも

やしきもよきも」かわらないと詠む右の歌についても、「みのほど事を説いているのである。したがって、「へだてもなし」とか「いすのではなく、あることを前提として、その差を思いやることの大わると主張している。この主張は、「高卑・貧富」などの差をなくわると主張している。この主張は、「高卑・貧富」などの差をなくわると主張している。この主張は、「高卑・貧富」などの差をなくわると主張している。この主張は、「高卑・貧富」などの差をなくわると主張している。この主張は、「高卑・貧富・男女・老少の情」に通じ、あるいは人々の生活ぶり、高隆は、歌論『布留の中道』において、人の世にあっては、「都鄙魔庵は、歌論『布留の中道』において、人の世にあっては、「都鄙

る。それは、この題が和歌題であったことが、その発想にも影を落ち、和歌的本意に足場を置いての句作りであった、ということであち、和歌的本意に足場を置いての句作りであった。すなわら思いやる立場を守った。それが、和歌の立脚点であったのである。「貴」の世界に属するものであり、「賤」を詠む場合もその世界から思いやる立場を守った。それが、和歌の立脚点であったのである。ち、和歌的本意に足場を置いての句作りであった、ということであったとが、その発想にも影を落ち、和歌的本意に足場を置いての句作りであったことが、その発想にも影を落ち、和歌的本意とは、一般であったことが、その発想にも影を落ち、和歌的本意に足場を関しているのであった。とが、その発想にも影を落ち、和歌的本意に足場を関しているのではないというべく、」を守って、伝統的な詠法を逸脱しているのではないというべん。

うを糺す必要があるだろう。貧賤に属するものをその世界に据え置ここで改めて、蕪村の、貴賤のわいだめを昇華した俳諧のありよといえるだろう。「蚊遣火」とそれらの人びとは、同じ貧賤の世界まいの住人にとって、蚊遣の煙のいとわしさもその身に応分であるまいの住人にとって、蚊遣の煙のいとわしさもその身に応分であるまいの仕人にとって、蚊遣の煙のいとわしさもその身に応分であるといていたと考えることができるだろう。

のである。
(一九九四・八・十一)
意味の広がりのところに、蕪村俳諧の豊かさを味わうことができる
意味の広がりのところに、蕪村俳諧の豊かさを味わうことができる
うところに、俳諧の意義があった。そして、貴・賤を昇華させた
貧賤と富貴がぶつかりあい、止揚して、新たな雅の世界を築こうと
貧賤と富貴がぶつかりあい、連揚して、新たな雅の世界を築こうと

[付記]論文作成にあたって、ご高配をたまわった浜田弘美氏に深

謝申し上げます。

京都府立大学女子短期大学部教授—